

男性の育児

埼玉県立大学 大塚 斉

もう13年になる。第1子が生まれた時、男性の育児を取ってみたいことがある。当時の取得率はまだ1・89%（2012年）だった。当時勤めていた児童養護施設では、多くの職員はローテーション勤務で、心理療法担当職員である私はローテーションには入っていなかったが、職場の公平性を考えると「育児を取ってみたいが、難しいだろうな」と思っていた。

第1子が生まれた時期に、いくつかのことが重なって、「人生は何が起ころうか分からない。やりたいことはやっておこう」と思い、育児休暇をお願いした。園長に話せば、困るだろうし、園長を困らせたくもなかった。その上で、自分の人生で大事なことと思い、選択したのだ。相談すると「後に続く他の職員に次々と育児を取らせてあげられるほど、職場の体力ないしなあ。でもわかった。せつかくだから楽しんで」と認めてくれた。妻の職場復帰に合わせ

て、1ヶ月の育児を取れることになった。「母親の育児の大変さが身を持って知れるチャンス」と大いに意気込んで育児に突入した。

妻が仕事復帰する初日。おっぱいなしで一日持つかと心配しつつ、子どもの食事と片付け、その合間に寝かしつけ。夕方少し暑さが和らいでくると、抱っこしてお散歩に出た。「シュールベルトの子守唄」を「ねむれ〜ねむれ〜パパの胸に〜」と歌うとよく寝てくれた。寝かしつけると夕飯作り、洗濯物の取り込みと大忙し。「全然休暇じゃない」と思っていた。夕方になると、早く妻が帰ってこないかあと待ち遠しくて仕方ない。「そうか。いつも妻が僕に早く帰ってきて欲しがるのは、愛されているからじゃなくて、子どもから目を離せないこの2人きりの世界から早く開放されたいからなのか」と残念な真実も知った。

せつかくだから色々経験しよう、広場開放にもドキドキしながら

行ってみた。数名のママと子ども達とが和気あいあいとしているお部屋に「こんにちは」と入っていく。「えっ」というママ達の意外そうな顔。子どもが交流するのをきっかけに「お休みですか?」（育児で）「え〜!」と驚かれ、「良い会社ですね」とかなんと。か。「お子さん何ヶ月ですか?」に始まり、子どもの体重、使っている抱っこ紐やベビーカーのブランドなど色々聞かれる。抱っこ紐のブランドなんて全然知らないし、そんな話かしたいわけじゃない。僕が話したいのは、おっぱいなしで寝かしつける方法なのだが、おっぱいを持つてくるママたちはそんなことを教えてくれない。精神分析ではこれを「乳房羨望」とか呼ぶのだろうか。

日中は何とか1人で子どもをみられるようになって、夜中に起きてしまった時のおっぱいなどは妻任せだし、やっぱり妻の負担の方が大きくなってしまうのだ。ママにはなれないまま、あつという間に1ヶ月が

過ぎ、仕事復帰となった。

職場に来てくれている精神科医の先生に「なかなか夫婦公平に出来ないなあと思った」と話すと、「男性の育児っていう特別なことをやっている」意識がある限りさ、どこまでいっても公平じゃないよ」と言われた。そうか。男性が育児をすることをわざわざ語らなくなり、ましてやこうして文章を寄稿したりしなくなつて初めて、父親の育児は当たり前になるのだ。

息子が1歳5ヶ月頃ピアノのおもちゃで遊んでいた。ボタンを押して流れてきた「シュールベルトの子守唄」を聞くと「ねんね〜」と笑ってパパを見た。育児も悪くない。ママにはなれなかったけど、パパにはなった。2024年には、男性の育児取得率は40・5%になった。育児をめぐる家族のあり方は、変わったのだろうか。